高齢者との豊かな交流活動（小学校中学年 総合的な学習の時間）

１　高齢者との交流活動の意義

急速な高齢化が進む社会で、家庭や地域の在り方が問われており、児童生徒の生活も無関係ではいられない。高齢者の人権に関わる問題としては、高齢者に対する身体的・精神的な虐待などや、社会参加の困難性などが指摘されており、社会全体の認識と理解を深めていくことが求められている。

学校においては、継続的に高齢者とかかわる学習活動を展開し、高齢者に対する尊敬や感謝の心を育てるとともに、高齢社会に対する基礎的理解や介護・福祉などの課題に関する理解を深め、高齢者と共に生きようとする態度を育てたい。

ここでは、小学校４年生が、学校の近くにある宅老施設（認知症対応デイサービス）の高齢者と年間を通して交流した事例を紹介する。

２　取組の内容

高齢者との交流学習のよさ

☆宅老施設を複数回訪問し、交流を積み重ねることで高齢者とのつながりを深めることができた。
☆交流活動の前に話し合い活動を行ったことで、交流の目的意識や相手意識を高めることができた。
☆ペアや小グループで高齢者とかかわることで、相手を尊重する気持ちや共に楽しむ交流活動にしたいという願いを膨らませながら活動することができた。
☆交流活動を振り返ることで、新たな発見や疑問が生まれるとともに、より相手を理解したいという気持ちを高めることができた。
☆高齢者や施設職員に喜ばれる経験や、友達の気付きや考え、行動のよさを認め合う活動により、自己肯定感や自己効力感を高めることができた。

学習の流れ

「音読の発表をぜひ聞いてもらいたいな。」
～交流を更に進めたいと願っている子どもたち～

○昨年から続いていた宅老施設のお年寄りと今年も交流したいという願いを大切にしながら、交流内容を考えました。
○どんな音読発表会にしたいか自分の願いを発表したことで、交流に向けての意識が高まりました。
○音読の発表を聞いてもらうお年寄りの顔を思い浮かべて、何度も練習しました。

大きな声で、はっきりと読むようにしたい。

句読点に気をつけ、登場人物になりきって読みたい。

私たちの音読を喜んでもらえるように頑張りたいな。

「あれ？　どうして下を向いているのだろう。つまらないのかな。」
～音読発表会でのお年寄りの姿を振り返る子どもたち～

○お年寄りの様子を振り返りながら（ビデオ視聴）、満足感や感謝された喜びを発表しました。
○お年寄りが下を向いていたり笑ってくれなかったりした様子から、「本当に楽しんでくれたのか」という新たな疑問が出されました。
○お年寄りの気持ちを確かめるために、施設職員の方の話を聞いたり、「擬似高齢者体験」をしたりしました。

とてもうれしそうで私たちも楽しかったけど、本当に聞いてもらえたのか分からなくなった。【Ａさん】

（擬似体験）とっても重いなあ

・・・とても重くて動きづらかったです。おばあちゃんたちは、こんなに耳が遠いんだなあ、わたしも、おばあちゃんになったらこんなになるんだなあと思いました。音読は、もう少し大きい声で発表すればよかったなあと思います。大きい声で発表したつもりだったけど、おばあちゃんたちには聞こえなかったのかなあと思いました。【Ａさんの学習カード】

○「みんなで、お年寄りにもっと喜んでもらえる交流会を考えよう。」

「もっとお年寄り（の思いに）に近づきたい。他のお年寄りのことも知りたい。そのためにみんなが楽しめる交流会にしたい。」～相手意識や目的意識を高める子どもたち～

○少人数グループやペアで決めたお年寄りに自己紹介したり話を聞いたりする中で、もっと分かり合いたいという思いを強くしていきました。

Ｂさんから仕事のことや学生時代のこと、運動が得意なことなどを聞いたよ。昔はお手玉や羽根つきをよくやっていて、得意だったんだって。もっといろんなお年寄りのことを知りたいな。【Ａさん】

○「お年寄りもクラスの友だちも、みんなで楽しめる交流会にしたい。」と新たな願いをもちました。

○一人一人交流してきたお年寄りの紹介をしながら、一緒にやりたいことを話し合いました。

Ｂさんと羽根つきをやってみたいな。でも、これは全員ができるかなあ・・・【Ａさん】

Ｔ：お年寄りのことがいっぱい出たね。たくさんやりたいことも出してもらったけど、どうやって決めていこうかな。

C1：おばあちゃんがパワフルに動くんじゃなくて、座ってできるものがいい。羽根つきは、走れない人が無理して走ったりするとけがをする。そうすると、僕たちも困るから座ってできるものがいい。

（【Ａさん】「安心してできるものがいいよね。」とつぶやいた後、手を挙げた。）

C2：ボール遊びも座ってできるけど、ボールが落ちたり遠くに行ったりすると動かなきゃいけない。C1 さんが言ったように、立った座ったり体を動かさないでできるものがいい。お餅を食べるのも喉に引っかかるのが心配です。

C3：羽根つきは、足が不自由な人はできないよ・・。

C1：車椅子の人もいるし・・・。

（【Ａさん】「Ｂさんも動くことは無理かもね・・。」と、隣の友だちに語りかけた。）

みんなで楽しめる会にしたい

○お年寄りの体のことを気づかいながら、全員ができることを考えていきました。互いの思いを話し合うことで相手意識がより明確になり、友だちの考えを聞きながら自分の考えた活動を検討していきました。

みんなが、こんなにおばあちゃんたちのことを思っていることを初めて知りました。みんなの意見を参考にして、おばあちゃんたちの笑顔をたくさん見たいです。（Ａさんの学習カード）

友だちへの新たな見方を広げ、共に学ぶ仲間としての信頼感をもち、お年寄りの笑顔に出会うことに喜びを感じたＡさん

～つながりを広め、深める子どもたち～

交流活動を行う前の子どもたちは、学校近くにある宅老所を目にするものの、そこで生活しているお年寄りを意識することはなかった。そこで、普通に生活しているだけでは出会うことができない高齢者と子どもたちを出会わせ、語り合うことを繰り返しながら交流活動を広げていった。

子どもたちは、交流を継続する中で、高齢者の姿を見つめたりかかわったりして、自らの気付きや思いを語り合い、徐々につながりを深めていきた。今まで自分があまり意識しなかった対象が、気になる、考えてみたい、かかわってみたい対象になり、無関心ではいられない存在になっていった。こうした無関心ではいられないかかわりが生まれたことが、互いの人権を尊重する態度につながっていったと考えられる。

◎身近な高齢化の問題、特に認知症の問題は、高齢者を、敬い、いたわる存在といった見方だけでなく、人間の尊厳という点から、感じ、考えていく問題である。認知症をはじめとする高齢者の人権に関わる学習は、家庭・地域の実態を踏まえながら、各学校で取り組むべき内容である。